

令和6年度第1回 立川市文化振興推進委員会 会議録

|          |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
|----------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 開催日時     | 令和6年4月25日（木曜日） 午後1時～3時                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
| 開催場所     | 立川市女性総合センターアイム 5階 第1会議室                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
| 次第       | <p>1. 立川市第5次文化振興計画について（諮問）</p> <p>2. 報告</p> <p>立川市第4次文化振興計画 令和5年度の主な取組状況</p> <p>立川市第4次文化振興計画の進捗状況について</p> <p>3. 協議</p> <p>立川市第5次文化振興計画策定に向けて</p> <p>4. その他</p>                                                                                                                                                                                                                          |
| 配布資料     | <p>資料1 諮問書（写）</p> <p>資料2 立川市文化振興推進委員会委員名簿</p> <p>資料3 施策10 文化芸術の振興（立川市第4次長期総合計画より抜粋）</p> <p>資料4 立川市第4次文化振興計画の概要</p> <p>資料5 文化芸術のまちづくり</p> <p>資料6 立川市第4次文化振興計画 令和5年度の主な取組状況</p> <p>資料7 立川市第4次文化振興計画の進捗状況について</p> <p>資料8 立川市第5次文化振興計画策定に向けて</p> <p>資料9 立川市第5次文化振興計画策定スケジュール</p> <p>資料10 文化芸術推進基本計画（第2期）の概要</p> <p>資料11 東京文化戦略2030【概要版】</p> <p>資料12 「障害者による文化芸術活動の推進に関する基本的な計画（第2期）」の概要</p> |
| 出席者（敬称略） | <p>[委員]</p> <p>委員長 今井良朗、副委員長 瀧川淳、</p> <p>宇治康、小林優貴、鈴木美智子、高木誠、成清北斗、堀江けんいち、松寄ゆかり、三浦康浩</p> <p>[事務局]</p> <p>産業文化スポーツ部長 井上隆一、地域文化課長 轟誠悟、市史編さん室長 齋藤安則、地域文化振興財団事務局長 足立香織、地域文化振興財団事務局次長 浅沼宏、地域文化課文化振興係長 稲福秀哉、地域文化課文化振興係主任 郡麻里</p>                                                                                                                                                                |
| 公開及び非公開  | 公開                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
| 傍聴者数     | 0人                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |

|      |                                                                                                                       |
|------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 会議結果 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・第4次文化振興計画令和5年度の取組状況について意見交換を行った。</li> <li>・次回委員会で行う内容について意見交換を行った。</li> </ul> |
| 担当   | 産業文化スポーツ部地域文化課文化振興係<br>電話 042 - 506 - 0012                                                                            |

## ■会議内容（要旨）

### 1. 開会

- ・会議に先立ち、事務局より事務局交代の報告があった。
- ・事務局より、文化振興推進委員会の会議は「立川市審議会等会議公開規則」に基づき公開となる旨の説明があった。

〔会議の公開について〕

この会議は、基本的に個人情報等を扱うものではないので公開となる。会議の傍聴にあたっては、定員を2名とし、傍聴席を設け資料も用意する。議事録は、「会議概要」をホームページと庁舎3階の市政情報コーナーで公開する。その際、各委員の名前は、委員長と副委員長を除き、発言順に「A委員、B委員……」という表記とする。公開前に「会議概要」の内容をご確認いただく。

- ・事務局より資料の説明があった。

### 2. 報告

- ・立川市第4次文化振興計画 令和5年度の主な取組状況

（委員長）市から第5次文化振興計画に関する諮問を受けることになっている。それに基づいて今後第5次文化振興計画をどのような形で進めていくか、課題あるいは今後の検討していくことについて様々な意見をもらえればと思う。それでは事務局から。

**（事務局より資料の確認があった）**

**（産業文化スポーツ部長が令和6年4月25日付の諮問書を代読し、委員長に手渡した）**

**（全委員に諮問書のコピーを配布した）**

（委員長）お預かりする。ただいま諮問書を受け取った。これに基づき第5次文化振興計画を進めていきたい。次第に従って、第4次文化振興計画のこれまでの取り組みについて事務局より再度説明をお願いします。

**（事務局より資料5・6について説明があった）**

（委員長）第4次文化振興計画に基づく取り組み状況について報告してもらった。何か質問、意見等あればお願いしたい。

今ご報告してもらった中で、ボランティアの数が増えているということだった。これは第4次文化振興計画から重要な重要項目の一つだったので、こういった形で広がっていくのはとても望ましいと思う。

（A委員）6ページについて。「学生・若者・障害がある方等の文化芸術活動への参加促進」というところだが、この立川市民オペラゲネプロ見学会というのは青少年、つまり「学生・若者」に向けてということだと思っている。アール・ブリュット立川というのは障害がある人に向けて、あるいは障害がある人もない人もということだと思う。障害にも色々な種類があり、なかなか難しいと思うが、例えば立川市には立川ろう学校が前身の立川学園があり、現在は聴覚障害のお子さんだけでなく、知的障害のお子さんも通ってい

る。立川学園と言えば東京都に4校あるろう学校の中でも長く続いているろう学校であり、立川にも手話のできるボランティアの方がたくさんいる。例えば対象になる障害の種類を聴覚障害などと絞って、聴覚障害の方に対して配慮をした事業ができると良いと思う。障害がある方もない方ということで、重点項目にしたらもう少し障害者に対しての配慮というか。立川学園は相談などで幼稚園前から通っている生徒もおり、また、東京都全域から生徒が通ってきているので、何か立川市としてアピールできる何かがあればと思う。

(事務局) 資料6には詳しく載っていないが、子ども向けの事業として、毎年東京都文化財団と共催で行っている、東京都ミュージックワークショップの中の一つで、聴覚障害のある子どもも一緒に参加できるプログラムがある。そのことについて立川学園にも訪問し、学園の先生方にも事業内容の説明をしている。学校が生徒を連れてくるというのは中々難しいと思うが、生徒の親にその旨は紹介するということだった。そのプログラムは手話付きのミュージックプログラムになっており、令和5年度実施の時は3組が参加してくれたそうだ。障害者向けのプログラムはちゃんと作らないと、普通のプログラムでは対応が難しい。アウトリーチとして学校に行く方は多くて、立川学園も色々な方に来てもらっているが、逆に生徒を外に一緒に連れ出していくというのはなかなか難しいとのことだった。その中で、3組の参加があったこともあり、今後も続けて事業を実施して、障害者の参加が少しでも増えていってくればよいと思っている。また、このプログラムは聴覚障害のある方だけではなく、健常者も一緒に参加するもので、健常者の方も障害者と一緒に参加する姿が良かったと思う。

(A委員) それはどこでやっているのか。たましん RISURU ホールか。

(事務局) たましん RISURU ホールでやっている。

(事務局) 1月20日(土)・21日(日)に実施した。先ほどの報告の際には詳しく触れなかったが、同じ6ページの「キッズ・ワークショップ等」という項目に書いてあるミュージックワークショップがそれにあたる。もっと立川が積極的に関わっていることが見えただうがよかったかもしれない。

(A委員) なかなかプログラムを作成するのも難しい。

(事務局) そういう方向けのチラシも作成して配布もしたが、こちらの受け入れ態勢もなかなか難しい。東京文化財団と協力をして、1つでもやろうという話しをしている。

(B委員) 今アール・ブリュットのことにも触れてもらったので発言をしたい。アール・ブリュット、イコール障害のある人、ということではないが、アール・ブリュット立川では主に知的障害や発達障害のある方の作品を発表してきた。立川ろう学校(現:立川学園)には2020年度まで、アール・ブリュット立川のチラシとか作品集とか出来上がったものを持っていき、活動を報告するなどして、つながりを持たせてもらっている。アール・ブリュット立川が中心ではないが、もう1点、立川の小学校7校ほどまわっており、障害のある人と小学校の子どもたちとで合計約100名規模、共同で絵を描くコラボアートという企画をやっている。午前中いっぱいかけて行うプログラムだが、聴覚障害や視覚障害、車いすの方、知的障害など皆と共同で制作をしている。この活動では市の障害福

社課と連携して、学校の体育館を全面使って宇宙を描くというプログラムをやっている。アール・ブリュット立川もボランティアとして関わっている。作品は市役所の庁舎内に飾って一般の市民に見てもらったり、小学校で作品展や卒業式にて展示してもらったりしている。ただもう少し、そういった活動があるということが一般の方に伝わっていけばいいと思う。障害がある人もない人も共に暮らしやすい立川、という条例があるので、その条例から考えてもそういった方達との関わっていけるプログラムや、アール・ブリュット立川の活動の幅なども広げられたらと思う。

(委員長) ここ数年で確実に広がってはいる。立川独自の活動と言えると思う。

(A委員) それが広報などで市民にもわかると良い。

(B委員) 以前の会議でも出たが、足りない部分である。

(委員長) そういう活動が周知されていくことが望ましい。他になれば次の議題に移りたいと思う。

では2つ目として「立川市第4次文化振興計画の進捗状況について」事務局から説明をお願いする。

#### (事務局から資料7について説明があった)

(事務局) 全部で14項目が成果指標として存在しているが、令和4年度末時点では3個、令和5年度末では5個まで達成した。第4次文化振興計画の進捗状況については以上である。

(委員長) 第4次文化振興計画の進捗状況の説明があったが、何か質問はあるか。

先ほども話があったが、着実にこの数年で様々な活動が進んでいるということが分かってもらえると思う。このあと第5次文化振興計画の検討をしていく場合にも、このことをどう踏まえて次に進めていくかということになると思う。先ほどの資料の中で、第4次文化振興計画策定時の現状と課題、おそらくこの部分がこれからの中心的な議論になると思うが、こちらについては次回、中心的な意見交換をするということで、メールなどで事前に事務局に意見や報告を送り、それに基づいて中身の濃い議論にしたいと思う。事務局もその予定でいる。何か意見はあるか。

(事務局) 補足で、今事務局が説明した中の、1枚目の「1. ふれる、たのしむ ～暮らしの中に文化芸術を感じることでできる環境をつくる～」の実施項目1の中の「①市民の文化芸術活動支援」の数値だが、令和6年度の目標が52.0%で、令和4年度では少し届いていない。この成果指標の基準が市民の割合となっているが、これは市でやっている無作為抽出の市民アンケートで得られた数値である。訊き方にもよると思うが、文化芸術にふれる機会をちゃんともっている、あるいは、少しだけそういう機会を持っている、音楽や芸術に触れる、あるいは自身で活動をしているとか、そういう回答が色々入ってこの数字である。委員長から少しずつ充実が出来ていると言ってもらった。アンケートの中には様々な立場の人がいるが、少しずつですが、我々の活動のが浸透しているのかなというのが肌感覚である。それから、J R立川駅の東側地下道だが、以前は殺伐として無機質で暗いイメージだった。それから一度壁画が描かれ、その後アール・ブリュット立川に依頼して再び壁画を描いてもらったのだが、非常に明るくなったと思う。以前は落書きがあったが、最近ではほぼ落書きはない。ゴミのポイ捨ても無いということだ。や

は「きれいにしましょう」とか言葉で言うよりも、壁画が描かれている空間自体が気持ちの高揚になるのかと感じている。それどころか、きれいになったことで「何かイタズラをしてやろう」という人がいると、却って目立ってしまうという、正のスパイラルのようなものが働いていると思う。西側の地下道にも同じように描いてもらったが、やはり無機質になりがちなところにアートを盛り込むことでかなり状況が改善されていると、行政の立場と、あと、一住民としても感じた。

(委員長) 環境を作るといったことも大事なことで。きれいにしよう、という以前に、まず、汚すことが出来ない、という感覚を持たせることが大事なのだと思う。一概にどういう方法を取るのが良いかは分からないが、環境をどういう形で、しかも継続的に作っていくかが大事だと思う。そういうことも今後考えていったらいいと思う。

他に質問等なければ、引続き第5次文化振興計画に基づいての今後の議論をしていきたいと思う。それでは事務局から説明をお願いする。

(事務局) 資料8「第5次文化振興計画策定に向けて」について説明したい。

#### (資料8の説明)

(事務局) これらの課題も踏まえながら、次回会議では本市計画の現状と課題について協議を進めるため、本日の会議での意見に加え、各委員に事前にメールで意見を伺い、整理をした上で、資料として配布したいと考えている。

#### (再び資料8の説明)

(事務局) そして、今回協議をしてもらう立川市第5次文化振興計画の到達目標としては、本市における文化芸術振興の成熟度を踏まえ、より自立した文化芸術活動を目指すような到達目標をどのようにしていくのか、意見をもらいたいと考えている。

(委員長) 第5次文化振興計画に入る前に前回も色々と様々な形で意見をもらったが、今回は今の説明に基づいた上で意見を聞きながら、次に繋げていく形にしていきたい。細かいところは、メールなどで事務局に送ってもらう形にして、前回と重なるかもしれないが、今日はもう少しじっくりとした形でまずは質問してもらいたいと思う。

(C委員) 先程、第4次文化振興計画の進捗状況と着地の見込みのところで説明してもらったが、これまで長い年月をかけて色々な活動とかアイテムが成熟してきたと思う。第5次文化振興計画に向けて取捨選択とか、そろそろこれはやめよう、とか、これらはもう少し集約しようなどという考えがあるのかどうか教えてもらいたい。また、広報的な取組方針の中の「つたえる、とどける」というのが最初かと思うが、今後、今ある広報媒体以外にどういうルートで、例えばこういう文化芸術活動についての会員組織を作っていく考えがあるのかとか、第5次文化振興計画に向けての新たな取組の根っことか種みたいなのがあるのかどうか教えてほしい。

(委員長) 実は前回丁度その辺りについての意見交換があった。やはりこれまである程度成熟している事業はどうするのか。重点項目にしても、もっとはっきりと前に出してやるかどうかということも議論した。そういうことも踏まえて今回議論していきたい。

(事務局) 第5次文化振興計画に向けての取捨選択というところだが、指標の到達具合からすると、まだすべてはできないかと思う。一方で重点的に取り組まなければいけない事項と

して、前回の中で情報発信に関する意見というのは非常に多くもらったところだ。いわゆる「つたえる、とどける」というところだが、それについても意見の一つとして、市内で色々な活動が行われていることは報告でわかった、ただ一方で市民としてそれが見えてこないという意見も出たところである。そうすると、その情報発信の手段として、立川市の広報手段としては市のホームページや「広報たちかわ」がある他、財団ではホームページや「ムーサ」などがある。一方でそれだけではなく、民間の企業の情報発信ということでこの間出た話の中の1つでは、立飛のような民間事業者がやっているTBSラジオ番組のような情報発信などもあるし、それらとどう連携していくのかというのは、次の広がりに向けて議論が必要だと思う。立川ビルボードなどによる情報発信も課題であり、その1つとして、市のホームページにおいて連携を図るべきホームページが見つけない、わかりづらいという指摘もある。他の事業主体との連携の他、市自体の見せ方というのをもさらに整えていくべきだと考えている。重点的な取組として行っていく必要があると認識している。その他、取り組みの種というところだが、前回の議論の中で個人的に非常に感じ入ったところとしては、D委員が言っていた内容である。立川への特別な思い入れがあった人というのは、大学などを卒業して出ていっても、また立川に関わっていただけるようなところがあるという話があった。市内では国立音楽大学や、近隣では武蔵野美術大学などがある。そういう芸術活動をされている方々が卒業後などにまた立川で活動をしてもらえると非常に街の魅力としても上がっていくのではないかなと思うので、その点はもう少し連携を図ることができないかを感じている。その点は次期の計画でも更に深めていきたい。

(C委員) それといわゆる事務的な取組、ということの他に、事業の性格付けというか、例えば芸術関係でいくと必ず芸術監督や舞台監督、アート系ではアートディレクターという存在がいると思う。必ずそれぞれの活動について中心になっている方がいると思うが、その方達をもっと前面に出したらどうか。ビックネームであればそれはそれだけで、すごいアテンションになるのかも知れないが、必ずしもビックネームでなくてもその方を出すことによって、文化活動としての実態が浮かび上がってくると思う。逆に、あくまでも事務的に処理をしていると埋もれてしまうと思う。タイトルだけは残るかもしれないが、じゃあ誰がやっているのだろう、どのようなものなのだろうということがよく分からなくなる。だから性格付けというか一つの例だが、中心になっている方をメインとした、誰がやっているのかというようなことを前面に出すということも次期の中では重点的に考えてもらえるといいかなと思う。

(委員長) 非常に斬新な意見だ。

(C委員) 実際にそういう方がいたはずだが。

(事務局) アートディレクターとして、例えば立川シアタープロジェクトという取組では演出家として〇〇さんという方がいて、子ども向けの活動を積極的に行っている。その中で、立川の演劇の1つの形を作っている。〇〇さんには活動をたくさんしてもらっているが、確かに何かそういう人物像も市としての見せ方があるのかもしれないと改めて思うし、まだまだ伝えきれていないのかもしれない。実際、立川ビルボードなどで取材、インタ

ビューなどをしてもらいながらその人物像をかなり浮かび上がらせてもらっているような状況ではあるが、その点については考えていきたい。

(委員長) 確かに面白い発想だと思う。私も聴きながら、〇〇さんのような人が該当するかなと勝手に頭の中に浮かべていた。ものすごく強固なものでなくてもざっくりと全体を見通せるような立場というような役割を担う方ということになると、確かに〇〇さんみたいな人が適任ではないかなと勝手に思った。〇〇さんは立川に対する思いがかなり強い方だから、また各委員の中でも検討すると良いのかもしれない。それ以外にも意見などあるか。いろいろあると思うので出してほしい。

今日配られた資料の中で、資料 10 の国の基本計画、この資料がやっぱりある程度は今回の議論をする上での参考にはなっていくと思う。資料 11 の東京都のものに関してはちょっと、やっぱりここには中々結びつかない感じだ。国の方向付けとしてそういうのを拾っていくと例えば多様性とか包摂性とか持続可能性とかはもう、今後の当然テーマになっていくだろうし、特に気になったのが 2 ページ目の最後の、文化芸術に対する寄付意識の醸成である。これが意外と、これから計画を考える上でのヒントになると思う。どういうことかということ、この国の資料には、なんだかんだいいことがいっぱい書いてあるけれども、現実にはほとんど予算的裏付けがない。そういう意味で、例えば都内の美術館でもほとんど今予算が削られていて、実際にはちゃんと活動ができないという現状が大半である。そういうところで、謳い文句は確かに分かるのだけれど、これをどうやって裏付けていくのか、という部分で、この寄付意識というようなことを、少し積極的に立川の中でも考えても良いのではないかと思った。例えばまちづくり協議会があるが、これについても前回様々な意見が出たのだが、活動基盤が脆弱なのである。なぜなら予算基盤がないから。それと人材の確保の確実性というのもない。例えばファンドのようなものをきちんと作って、そういうものをベースにしながら協議会やそれ以外の団体が一緒になって動いていく、そういう仕組みがあっても良いのではないかという感じがした。非常に個人的な意見を言いすぎているけれど、気になったものだから。そういうことも、もし各委員から意見があればぜひ出してもらえないかと思っている。

(副委員長) 自分も委員長に共感である。先ほどの資料 5 の文化振興委員会の全体像、あれなども対象として市民の中に小学生・中学生・高校生・企業と書いてあって、我々のような中高年が対象になってない。色々なイベントもすごくたくさんあるが、それらもどうも青少年を対象としたものが非常に圧倒的に多い中で、なんかこう中高年世代がすごく取り残されていると感じる。一方でボランティアはすごく盛んに増えてきているという望ましい状況である。例えば中高年世代が、私たちも文化芸術を支えている、「ささえる」というのもキーワードだから、支えているのだと思えるためにということで、頭の中にふっと浮かんだのがサポーター制度である。例えば先ほど話に出たファンドのようなものを立ち上げて、そこに一定の投資をしてくれた方には「何とかサポーター」のような称号を差し上げます、と。そのことで、我々市民の一人一人が立川市の文化芸術を支えているという意識をもっと高く持ってもらえるのではないかと思う。第 4 次文化振興計画策定時にはなかった言葉として、ウェルビーイング (Wellbeing) という言葉がある。

最近、これはどうも無視できないような言葉になりつつある。ようするにこれは人が心と身体、そして社会的な繋がり、これを全体としてバランスよく持って、「良く在る存在になる＝ウェルビーイング」というようなそんなコンセプトらしい。その中の例えば社会的な繋がりという意味でも、色々な社会とのつながり方、支え方がある。その一つとして、今まさに言ってもらったようなファンドを作って資金的なバックアップをしていくなどというのは、非常に新しい取り組みかなと思った。

(委員長) そういう形で、一つのきっかけだが、各委員の意見が繋がっていけばと思う。

(B委員) まだ実現していないので、先走って話していいことなのか分からないが、ふるさと納税の中で、アール・ブリュット立川を返礼品の対象にしてもらえないかと言っている。それが可能であればということで少しずつ動き出しそうな感じなのだが、その中で、先ほど委員長が言っていたファンドの部分に関連した話があった。しっかりした計画があれば、ふるさと納税としてファンドの形で返礼品として設定することもできるという話を聞いた。一作家だけではなくて、文化芸術に向かって、こういうプロジェクトで私達がやっていこうと思っているということを出し出していけばそういうことも可能なのだということが、この間市の総務課の方と話していて分かった。1つの手立てとして、ふるさと納税として立川にも寄付金が入る、他市の人が寄付してくれるし、新しい芸術に関するプロジェクトもそれによって進められるのではないかなと思う。今のお話を聞いていて、そういうことも可能なのではないかなと思った。

(委員長) 確かに基盤の作り方も一つである必要はないと思う。そういうファンドもあって、ふるさと納税型もあって、ただし目標とか目的を明確にする。例えば「この金額までは全部アール・ブリュット立川に使います」というような、そういう積極的な売り出し方も有り得るのだろう。ファンドの作り方も様々な形があって良いし、それで、例えばまちづくり協議会の場合には全体をサポートするための資金としてそういうものを求める。そこで当然担い手の確保にも繋がっていくとは思いますが、尚且つボランティアも、増えてはいるが、さらに増やすこともできると思う。そういう形で色々分けて具体化していくというのは有り得るかなと思う。

(E委員) ふるさと納税の話が出たので。以前、議員と話した時に、日本は寄付文化が少ないから、議員に働きかけて、芸術納税みたいなものがないのかという話になった。そういう文化芸術に秀でている人を、ふるさと納税と同じように優遇させるような。聞いたところでは、立川市でもふるさと納税で入ってくる寄付金より、市民が他市にふるさと納税をすることで出ていく方が多いみたいである。東京都の自治体が全体的にそういう状況らしい。芸術納税みたいなものだって、音頭取りがいればできないことはないのではないか。それには力を持ったところとやる。エネルギーがあれば、やればできるのではないかなと思う。いつも話をするが、先進国の中で芸術を職業としていて食べていけないのは日本だけである。だから教え子には食べるなら海外に行け言うことになる。海外に行けば結構活躍している。ところが日本に帰ってくると、ある芸術団体に入っているが給料が無い。結局、食べていけないから公務員になった人もいる。これは次の世代の課題になると思うが、日本だけそんな状況になるというのは、本当はありえないことであ

る。日本以外では世界のどの国でもちゃんと給料をもらって生活している。どんな小さな町でも、芸術で食べていると。海外の人と話していると、なんで日本だけそういう状況なのか、文化なのかアイデンティティの違いなのか。その辺は今後どうやって行くか、大きい問題になってきていると思う。使い道は今の市のふるさと納税の候補の中にある、「子どものために……」とか、これに使ってくれみたいなものを作ればいいと思う。芸術を対象にするというのはあまりないが。芸術、アーティストのための支援制度、そういうのが出来ればというのが自分の夢である。

(委員長) 日本の場合はこの、国の方針の資料を見ながら、国の資料はこれとお題目は立派だけれど、裏付けになる予算なんかどこにも無い。丁度、一昨年のまちづくり協議会のシンポジウムでも話題になった。韓国の一人当たりの文化予算は日本の約5倍もある。結果的には、この顕著な違いが現状だと思う。しかしそれは言っても仕方がないから、何か工夫して、そういう活動基盤作れるように環境を作るしかない。

(E委員) やっぱり人材だと思う。例えばJリーグの川渕さんのような人材。バスケットボールだって、職業として食べていけなかったが、川渕さんがBリーグというのを作った。川渕さんも言っていたけど結局はあの人の人脈だそう。芸術にもああいう人が欲しい。結局は人材・人脈だと思う。そういう人をトップに持つことによって、行動ができる。そういう繋がりが文化芸術にもあればいいんだけど。

(事務局) 税金の話ということだと、目的にあった納税をしていただくというのが制度上中々難しい。国あるいは都道府県と協議をしてできなくもないのだろうが、そういう回り道をするよりも、現状でクラウドファンディングとかふるさと納税という制度がある。元々ふるさと納税というのができた経緯というのが、どうしても首都圏の方にお金や人口が集中してしまう。それを、ふるさと、つまり地方を元気にしよう、地方にも良いものがいっぱいある。ヒト、モノ、カネ。良いものがあるのにそれらを集めるのが難しいというようなことで、ふるさと納税という制度ができたのだが、実際に稼働すると、返礼品の争いになってしまったということで、総務省から指導が入った。ふるさと納税というのは使い方によっては文化芸術の街を立川市はつくる、やる、ふるさと納税で寄付をしていただくことによって、こういうことがどんどん元気になっていくということを打ち出せる。官民一体的にそういうことが出来れば、ふるさと納税という制度を使ってお金を集めるということも出来るかなと思う。あと、クラウドファンディングは目的にピンポイントで訴求出来ると思うが、やはり賛同する人を集めなければいけないということで時間がかかるということもある。ただ、色々な手法があると思う。先ほど副委員長の方から意見があったが、どうも中高年が置いてけぼりになっているというのがある。

今、行政の中にいて感じるのは、行政の意識が少子高齢化、人口減少への対策ということになっている。そうすると、やはり子ども達に選ばれるというのはどういうことなのだろう、子育てに良い街はどのようなものなのだろう、高齢者に住みやすい街と考えてもらうにはどうすればよいのだろう。どうしても子どもとか高齢者に目がいきがちなと思う。それ以外の世代について考えていない訳ではないが、フレーズとしてそっちの方がトレンドになってしまっているというのは確かにある。支えているのは中高年だから、

そこのところを少し厚くするようなフレーズ、文言のところを出してもいいのかなと思うが。置き去りにしているつもりはないが、今のトレンドとしてはどうしても子ども、子育て世帯や高齢者の方に目がいくと思った。

(委員長) 選挙は大体、子どものことか、高齢者のことをやりますって言わないと当選しないから。私も 20 年来話をしているが、世代を繋げないとダメだと思う。世代をばらばらに考えるからダメなので、それを繋いでいくことによって初めて成立することだと思う。繋ぎ役がどの世代が一番向いているかっていうのは、モノによってちがう。高齢者の方が結べるもののあるし、小さな子どもを連れている母親が結べるものもある。それぞれ状況ごとにどの世代が繋げることが出来るか。このことを徹底してやっていくだけでも全然違うと思う。先ほどまで出てきていることの延長線上でいけば、やっぱり環境を作っていくしかない。やっぱりこういう環境を作っていくということになれば必ずこういうことが生まれる、できる。それから色々な分野で、芸術文化全体に絡んでいけば一番良いはずである。ただ、とても難しいのは、「今ご飯が食べられないのに、芸術なんか知らない、冗談じゃない」という意見をよく言われることだ。これを言われるとどう返すのかがすごく難しい。しかし、返す時に一番大事なことは、本当に日常の中で文化芸術を享受できる環境にあること。小さい子どもであれ、どういう世代であれ、なんかこう触れている、こういうことが美術だとか音楽だとか演劇だとかバレエとかこういう形なのだって触れられること。そういうものに日常的に触れていくことで、これは生きるために必要なのだと実感を持たない限り駄目だと思う。ただ文化芸術は生きるために必要なのだと言うだけでは絶対に駄目。なぜなのかというところを丁寧に説明していくこと。小さい時にこういう体験をすると違うでしょうとか、色々なそういう話をする中で、結果的に芸術全般が実は人間にとって生きるための糧になっているのだということを、ちゃんと説得することが出来ないと駄目なのだと常々そう思っている。確かにとても難しい。だから先ほどのふるさと納税による支援の話も、とてもいいアイデアだけれど、納税者にとっては「いやいや、食えないのにそんなの冗談じゃない。そんなことに税金を使われたら困る」という言い方をされた時に、どう返すかということは常に考えておかないといけないだろうな、と思う。

(E 委員) 自分の組織も構成が高齢化してきている。若い働き盛りの 50 代くらい、50 代でも若い位だが、そういう人たちがなかなか参加してくれない。大体が仕事をリタイアした人たち。団塊の世代の人は色々趣味を持っているけれど、今の中高年というのは訊いてみたらあまり趣味を持っている人がいない。全体的に見ると非常に趣味に対して不器用な人が多いと感じる。家庭は大事にしているけれど、自分の趣味を積極的にやっているという人は少ないのではないかな。50 代 60 代の人を如何に発掘していくかということが非常に課題だと思う。また、若い人にとっては教育の問題もあるのではないかなと思う。今の若い人たちは非常に短絡的というか、裏を読むことをしないというか、簡単に人を信用してしまうように思う。言葉よりも文字の方を信用してしまっている。顔を見ると何も話せなくなってしまうというか、人対人に対して弱い。文章の裏を読む力も非常に浅くなってきているように思う。

(F 委員) 副委員長が言っていたウェルビーイングという言葉が、今後かせない時代になってくると思っている。というのもグリーンスプリングスが出来た 2020 年、立ち上げた時のコンセプトがウェルビーイングという言葉で、当時、地域の人にはほぼほぼその言葉は何だという程度で、働いている人自身も全く分からないままだった。今 4 年経って、だんだん言葉として定着してきて、あと数年経てば当たり前の言葉になると思うが、この感性、この言葉というのはすごく大きくて、これが普通になって常識的になっていけば文化芸術にとってはすごく実は追い風になっていくのではないかと期待して考えている。それに合わせて文化芸術も変わっていかなければならないと思うが。文化芸術に触れていること、関わっていること。多分ウェルビーイングとは気持ちいいとか心地いいとか、楽しいって状況になることだと思っていて、そういうことが肌で実感できる人達は、どんどん文化芸術を欲してくれる。そういう人たちが増えてくれる時代に入ってくると思う。その時にいかに参加できる場があるか、というのが、年齢を問わず、世代を問わず、参加できる場が地域にあるか、ということがすごく大事だと思っている。そんな中で今、〇〇さんがやろうとしているダイアログという活動が広がっていった欲しいと思っている。しかも継続していった欲しい。すごく期待する事業のひとつでもある。2・3 年前から始まった、あきる野市の「あきる野ダイアログ」というのがある。市民で運営していて、なぜそういう活動が起きたかという、東日本大震災の時にみんな口に出して色々なことが言いたいけれど話せない、話せば賛否があるようなことだったりして鬱憤が溜まっていた。そこでダイアログをやった時にすごく市民の良い融和が生まれたらしい。それをまちづくりに生かそうということでやり始めて、去年にはもう 50 人くらいが世代を超えて集まった。色々な業種業態の人がいて、しかもそこに周辺 3 市町村の首長がいて、1 つのテーブルに座って、議員もいてとか。そこで自分たちの街を一体どういう街にしていきたいのかを対話する、というもので盛り上がっていた。そういうもの、対話をする場というのを実はみんな欲しがっていると思うので、それが立川に出来て、参加する人は立川に住んでいる人に限らない。そういう場がしっかりと立川に確立してあれば、きっと情報発信力も増すと思うし、文化芸術の支援をする人達の造成、寄付とか色々な団体への参加の入り口にもなるし、一番の要になるのではないかなという風に思う。そういう要素が次の計画に入ってくればいいと思う。

(委員長) 第 5 次文化振興計画のテーマの 1 つは場作りだと思う。子ども未来センターももう少し使い方を考えればいいと思う。みんなが自由に集まれる場所、広場でもいいと思う。

(G 委員) そういうのがまだわからなくて気づいたら楽しいんでしょうけれど。気づく楽しさを発信できたらと思う。

(委員長) どうやって知っていけるかという仕掛けも必要だと思う。

(H 委員) 「つながる、ひろがる」ということで、邨田丹陵展のように砂川で作品をやっていて歴史があるし、立川にもこんな歴史があるんだよと知るきっかけを作れば、もっと関心を持ってもらえると思う。他分野との連携をもてたらいいと思う。

(委員長) 実はアーカイブスの話も前回あって、たましんや市の市史編さん担当にもちゃんと資料があってこれをデジタル化して誰でも閲覧できるようにしないといけないという議

論になった。

現状の活動もそこに繋がっていけるようにするのも大事だ。

(事務局) 技術的に進歩している時代だから、冊子にするだけじゃなくてデジタル化にしていくことが大事だ。

(委員長) 市史編さん室にも相当数の資料がある。たましんはすでにデジタル化されているようで、単に過去じゃなくて現在から未来に繋がるようにしていくといい。

(事務局) 今市民の方に協力してもらって市史編さん事業も頑張っている。

(委員長) 他にはないか。ぜひとも今日は全体のざっくりでいいと思うが、今日も様々な意見やメールでもいいので次の委員会に繋がっていくと思う。第4次文化振興計画までで、ある程度の方向性が見えてきて、ある程度実際形にはなっている、今後は弱かったところを明確にしている、弱かったところを重点的にする。そちらの方をよりやっていきたいと思う。他になければその他ということで事務局に願います。

#### **(事務局より本日のまとめなどを述べた)**

(事務局) 次回の開催は、7月を予定しているが、その会議では、計画の現状と課題について、さらにご意見を出してほしいと考えている。そのため、各委員には事前にメールで意見を出してもらい、整理をした上で、資料として配布したいと考えている。

また、本日意見をもらった到達目標と取組方針の方向性を踏まえ、「実施項目」及び「重点取組項目」について検討してもらいたいと考えている。

なお、7月の開催日程はまた改めて調整する。

#### **(D委員がオンラインにて挨拶)**

(D委員) 繋がるというところでそれぞれの立場は違うし、状況も違うし、地域の関わり方を考えたときに何か方法があるんじゃないか、そういうところが明確になってないのがこれからの課題になってくるんじゃないか。自然発生的な場所の提供も文化振興になるんじゃないかと思う。意識していくことも重要だと思う。

(委員長) 最後に副委員長より、あいさつをお願いしたい

(副委員長) 新たなステージになったわけだが、10年以上にわたって多岐にわたる活動があって、活発なダイアログができたらいいなと思う。夢物語で終わらせないということが大切だと思う。